
無尽島

行天店

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無尽島

【Nコード】

N6836L

【作者名】

行天店

【あらすじ】

飛行機事故により主人公がたどり着いたのは、海が綺麗などこの島。そこは無人島なのか、それとも……。主人公を待ち受けるサバイバル冒険活劇「無尽島」ここにはじまりはじまり。

1日目(1)

はじめに聞こえてきたのは波の音だった。
決まった間隔と一定の音量で、何度も何度も繰り返される浜辺の音。

はじめに鼻に入ってきた匂いは潮の匂いだった。
生温く少し鼻につき、嗅いでいるだけで口の中がしょっぱくなるようなそんな匂い。

はじめに感じた感触はざらざらだった。
肌に直接密着してくるような砂と、その中に時折混じっている硬い貝殻の感触。

「……………うん、……………」

はじめに見た景色は海だった。
まだぼやける視界の真ん中に映る、透き通った綺麗な海。

「……………こ、ここは、……………どこ……………だ？」

僕はまだ完全に言うことを聞かない自分の体を少しずつ動かして立ち上がった。

体や服のあちこちに付着した砂が気持ち悪い。特に服と身体の間に入った砂はより一層僕を不快にする。

軽く砂をはたいて気がついたのは、僕の体がまだ少し濡れていること、そのせいで砂がなかなか頑固でとれないことだった。

辺りを見回すと、そこは旅行会社のPRチラシのようなオーシャ

ンブルーが広がっていた。

何一つ混じりつけのない透き通った海にその中に見えるサンゴ礁の大地。

そしてそのサンゴ礁の周りを動き回る魚、魚、……たこ？ 亀？……………。

とにかくハワイや沖縄を思い描かせるような、綺麗な海だった。

「一体ここはどこなんだろう……………」

さつきより滑舌になった口で僕は淡々と今自分が置かれている状況を一言で表す。

キヨロキヨロと周りを見回してもあるのは海と僕の背後に広がる鬱蒼とした木々。海岸に近いのに、いやもしかしたら海に近いせいなのか、やたらめったら背丈の高い木々があった。

ヤシの木はわかるとして、他の見慣れない種類の木々もあるせいか、なかなかどうしてこうも不気味さを感じさせるのだろうかなどと思ってしまう。

「…………ん？ まてよ。…………どうして僕はここにいるんだ？」

ようやく頭もはつきりしてきて、今置かれている状況ではなく、どうしてこうなったかの方がまず先ということに気づいた。

首を傾げつつ、記憶の海を潜っていく。

……………

飛行機…………、帰国…………、揺れ…………、

僕の頭の中でどんどんキーワードが脳裏を過^へってゆく。

酸素マスク……、救命胴衣……、救命ボート……

なんだかすごく嫌なことを思い出しそうだ。

嵐……、大きな波……、そして……。

思い出した。何もかも。

僕の名前は星野^{ほしの}流衣^{るい}。女の子名前のようにも聞こえるが、列記とした日本男児だ。子供の頃に付けられたあだ名は「ルイ」で、某爆弾量産無法投棄の白いあいつが出てくるゲームのスーパーマ。オデいうところのヨ。シーのポデイションにあるキャラクターから付けられたものだ。

今年四年制の大学に進学し、ローラースケート愛好会に入会した。そのサークルでの初の夏合宿は、アメリカでローラースーツを体験しに行こうというものだった。

ローラースーツというのは、要は全身にローラーをつけた状態のこと、その状態で坂道を滑走していくというものだ。

車の交通量は少ないが、一般道でやるものなので、正直いってめちゃくちゃ怖かったが、かなりいい思い出になった。

その合宿の帰り、僕らを含めた乗客、スタッフ全員に災難が起きた。

帰りの飛行機の中、機内も証明が落とされ、多くの乗客が安眠している中、突然体を打ち上げられるような揺れが僕らを襲った。

多くの乗客が悲鳴に近い声をあげて驚き、スタッフの人たちもそ

れを鎮めようと大声をあげていた。

やがて一旦揺れは収まり、シートベルトの着用灯が光り、シートの上から酸素マスクが落ちてきた。スタッフは懸命に僕らに呼び掛け、皆がその指示に従った。

辺りを見回すと、ちらほらと乗客の荷物が散らばっているのがわかる。そのせいかケガ人も何人が出ており、先ほどの揺れの凄まじさをようやく思い知った。

「おい！ この飛行機落ちてるぞ！！」

乗客の日本人の一人が突然そう叫ぶと、皆が一斉に窓の外を見た。そこに見えたのは僕らの乗っている飛行機がゆっくりとだが確実に海に向かって落ちていく事実だった。

スタッフもそれに気づき、すぐさま僕らにシートの下の救命胴衣を着用するように指示をした。

そして段々と海面が近づいてきて、そして、ついに飛行機は海にぶつかった。

機体が擦れる様に海に衝突したのか、今度の揺れは先ほどとは違い前後に揺さぶられるかのような衝撃だった。

そして飛行機が止まるや否やスタッフが救命ボートの準備をして避難の準備を始めた。

5分も経たずして僕らは誘導される。

その際、スタッフは腕に抱えるほどの荷物を手放さない人やハイヒールみたいに尖った靴を履いている人、我先にと外に出ようする人を迅速に対応して、次々に外に出していった。そして僕も飛行場以外で飛行機を降りることとなった。

全ての救命ボートがスタッフの手によって飛行機からすぐに遠ざけられた。理由はすぐにわかった。飛行機が沈み始めたからだ。

そして飛行機はある程度沈むと、後は海に吸い込まれるように急速にその姿を消した。

僕にはそれがどうにも現実のように終えなくて、まるで映画を見ているかのようにただただその様子を眺めていた。

そして更なる悲劇はすぐに起こった。

救助を待ち始めてだいたい10時間くらいだろうか、乗客の人中には早くも疲れを見せ始めた人が出てきて、船酔いが悪化する人も出てきた時だった。

辺りはすっかり真つ暗になり、スタッフは他の救命ボートを見失わないようにライトでお互いの位置を知らせあっていた。

すると突然雨が降ってきた。

スタッフは同乗している人に手伝ってもらって雨よけをボートにすぐに取り付けた。

そして程無くして嵐が僕らを襲った。

波はそれまで以上に高くなり、揺れは今まで以上に残酷になった。何度も何度もボートは傾きかけ、いつ転覆するかわからない状況だった。いつまで経ってもそれが終わることはない。

そして一瞬雨よけの一端が外れて暴風と暴雨が同時になだれ込んできた。

「お願いします！ もう一度そこをつけ直してください！！」

スタッフも一歩も動けないといった感じで、一番近くにいた僕がそれをしようと思った瞬間。……急な波に襲われた僕はボートの外に投げ出されたのだった。

以上回想終了。

全てを思い出した僕が導き出した結論は、どうやら僕はどこかの島が陸に打ち上げられたということだった。

この場合、全く未知の場所に運良く生きて打ち上げられたのが幸運なのか、それとも救命ボートから落ちてしまい助けが来るかどうか分からなくなった不幸なのかは分からないが、とりあえず今は前者を喜ぼうと思う。

「さてと、これからどうしようかな……」

この状況をいつまでも悲観していても仕方ないし、今はここにはいるのかどうか重要だ。人がいれば、何かしらの連絡手段があるだろうし、この状況を話せば寝具ぐらいは貸してもらわれるかもしれない。

もう一つは、ここが島なのか陸なのかがまだ分からないってことだ。ただ、浜辺沿いに遠くを見る限り陸地が続いているようには見えないので、多分島だと思う。

そうと決まれば後は行動に移すだけだ。

僕はとりあえずその辺の少し大きめの枝を使って、浜辺に大きく「SOS」と書いて、浜辺沿いに歩き始めた。

これからどうなるかは分からないが、今僕がやるべきことは分かっている。

1 日目 (1) (後書き)

今度は一般小説傾向の小説に挑戦してみようと思います。

時折の更新になると思いますが、よろしければ読んでやって下さい

w

1日目(2)

今の日本で本当の暗闇を実感できる場所はあるのだろうか。

いや、余程人里離れた土地に行かなければそうそう出会えないと思う。

自分の住んでいるところを中心にして、お隣さん、ご近所、コンビニ、公園、飲食店みたいに、大体夜でも生活の音や明かりみたいのがあるものだ。

携帯があればライト機能で明かりが確保できるし、喫煙者ならライターを持っているので明かりにも暖にも困らない。

「……………寂しい」

しかし電気やガス、というか人工物がないこの島でそれらの「明かり」や「暖かさ」は無い。

聞こえるのは波と風の音と虫の鳴き声だけ。旅行や南の島で星空キャンプとかなら、都会の喧騒を離れて……みたいなノリで楽しめるのだが、いつ帰れるかもわからない、自分以外に人がいないかも知れないこの状況下では、ただただ不安と郷愁が込み上げてくるだけで、……………そうすごく寂しい。

とりあえず、寂しさを紛らわせるために、今日一日を振り返ってみる。

浜辺沿いに歩いて腕時計(防水)の分針が一周した頃、海岸に打ち上げられていたトランクケースを見つけた。おそらく飛行機が着水した時か沈む時に溢れ出たやつが、僕と同様にこの島に流れ着いたのだろう。

早速使えるものがないか中を確認してみた。

「……………こ、これはっ!？」

まず最初に見つけたのは、肌にしつくりと優しい肌ざわり、薄く透き通るような布地、綺麗な花の装飾がされたデザイン、そして色は黒。

つまり、それは国民的マンガの七つの玉を集めて初めて登場した何でも願い事を一つ叶えてくれる東洋風の龍に、二足歩行の子豚が誰よりも早く叫び獲得した全中学生憧れの物、(ギャルの)パンテイーであつた。

(……………ごく)

そして僕はそのPを自分の鼻に……………

「——そおっい!！」

は持つていかず、開けたトランクの中に叩きつけた。

まあ別に興味がないわけではないけど、普通に考えればどんな人が着けている下着かもわからないものに、変態的行為をするほど僕は腐っていなかっただけの話。

というか女性のトランクだったのか、下着と着替え全般と洗面用具、化粧品、あと何かのカタログ見たいのが入っていた。まあ旅行に持っていくもの全般が入っていた。

(使えそうなものは……………)

僕はとりあえずトランクケースを物色して、使えそうなものとそれ以外に大まかに分けて整理整頓し直した。

結構使えそうなものを選ぶのに時間をかけてしまったが、そこま
で大きなトランクケースでは無かったので、すぐに終わり、そのト
ランクを担いでまた歩き出した。

トランクケースのこともあり、他にも何か落ちているかもしれない
と思い、それを意識しながら歩くようにした。

日が真上から大分傾いてきた頃、500mlペットボトルを発見
し、夕日が射し始め、砂浜から岩場へと道が変わった時に、機内食
で使った(多分)プラスチックのお盆を発見した。

足が疲れはじめ、日がもう沈みそうな時に、岩場からまた砂浜に
出た。

暗くなつてからもしばらく歩いたが、一回石に足を引っ掛け転ん
だことから、今日はもう休むことにした。

そして体を横にしてからしばらくして、寂しさをじわじわと感じ
る今に至った。

(とりあえず寝よう。うん)

そう思い目を瞑り寝ようとするが、……………全然眠くならなかつ
た。

暗闇がそうさせるのか、

助けがくるかもわからない状況での不安と、

こんなところに一人にされてしまった恐怖と、

潮風がねつとりと体に張り付いてくる不快感と、

目が覚めてから食事らしい食事をとっていないので空腹とが同時
に襲ってくる。

とてもじゃないが、寝られそうにない。

友達からはいつも飄々としていて感情の起伏がないとか好き勝手
言われることもあるけど、僕にも心や感情というものはある。

というか友達のことを考えたらまた急に寂しさがこみ上がってきた。

僕が今できるのは、寒さや恐怖が体に入ってこないように背中を丸めて少しでも表面積を減らして自分の身を守ることぐらいだった。

せめて焚き木でも出来れば、少しはマシになると思っけど、ライターも、自力で火を熾そうという気力も体力も僕には残されていなかった。

ロウソクを使ったアロマとか確かあったと思うが、今になって「火」に触れ、見ることにどれほど癒されるかを知ることとなるなんて、まだ飛行機が飛んでいた時の僕は絶対に思うことも考えることもないだろう。

そして。

もう僕は大学生なので、人前で泣くことは今後無いと思う。

でも、今は一人だったわけで、周りに誰もいなかったわけで、

だから少しだけ、僕は泣けた。

結局、その後少しすっきりしたおかげか、いつの間にか僕は寝ていた。

1 日目 (2) (後書き)

この小説はセミリアルな感じにしたいですね。

2日目(1)

「……………ん、」

瞼まぶたを通して光が入ってくるといったら少し語弊があるけど、まだ目を閉じているのに明るいと感じるということは、日が昇ったということで。

意識が夢から現うつに戻ってくると、次第に昨日は纏わりつくような潮風が不快に感じたが、朝のひんやりとした空気と一緒に吹いてくるこの潮風は不思議と、むしろ清々しく目を覚ますには快適と言ってもよかった。

「そつか、結局寝れたんだな」

なんだかんだ言っこの目覚めの良さから考えて、熟睡していたのは間違いないだろう。

しかし、この状況でここまで熟睡できたとなると、やはり友達が言うように飄々というか、繊細さというものが僕にはないのかもしれない。

おまけに布団や枕が無いところでなので、内側だけでなく体の方も大雑把にできているのかもしれないと思う。

ぐぎゅるるるるうゝ

そんなことを考えていると、昨日から満足にしてもらえていない腹の虫が鳴いた。

「は、腹減ったなあ」

それに正直言うと喉もカラカラだ。

まだ島を回っている最中だが、せめて今日一日動けるぐらいの栄養は取っておきたい。

そう思いつくと、まだ起きたばかりでいうことを聞かない体に鞭を打って四肢を動かした。

またここに戻ってこれるように、適当な枝を何本か砂浜に刺し立てて、荷物はトランクケースに入っていたバスタオルとビニール袋、それに500mlペットボトルを持って、僕は鬱蒼とする木々の中に入って行った。

この島の植物から熱帯か亜熱帯気候に位置する所なのだろうと、足場が不安定な地面を歩きながら僕は思った。

珍獣ハンターの番組でよくジャングルのような所がテレビに移されるが、今僕が歩いているところは、それよりももう少し緑が濃かった。

テレビ番組とかでは、ジャングルといっても、何度も人が行き来しているからだろうが、粗末だが「道」のようなものが意識するとあるのがわかる。

しかし、この島はまだ開拓されていないのか、道らしい道もなく、毎回毎回自分で雑草を踏んづけては進むの繰り返しなので、正直この空腹時に余計な体力を使ってしまう、さらに自分の体が重くなっていることに気づく。

「こ、……これは、マジでヤバいかも、しれない」

息絶え絶えでそうボヤいても、まだ目の前や頭上には食べ物らしきものは見つからない。

（こんなことなら、まず初めに食べ物と飲み物を探せばよかったな

あ)

今更ながら昨日の自分の判断が悔やまれる。

あの時は、今すべきことは島、というかこの土地の全体図を掴むことだと思っただが、それよりも食糧の確保がサバイバルにおける基本中の基本ということをしつかり忘れていた。

いや、忘れていたというよりは知らなかったが正しいか……。

特に食べ物に困ったことがないので、人間の三大欲求に対する危機感なんてものは、きっと薄くなっているのだろう。

ぐるるうるうるうゝ

胃が軽くなり過ぎて、腹の音もなんだか変な音を立てるようになってきた。

それにこうやって考え事をしていると、余計に腹が減る。

よし、無心になるんだ。無の境地だ。心を無にして食べ物を探すんだ。

.....

.....

.....

.....

.....

.....む、無理だ。

下手をすると、気付かないうちにそのままポックリお陀仏しそう

だったので、考え事を考えないようにする考えは考えないことにした。

それからしばらくもう駄目だと思いながらも歩いていると、耳に入ってきた音がある。

波の音をザーザーとするなら、川の音はチヨロチヨロチヨロだ。

そう、水が流れている音が聞こえた。

期待と喜びを胸に僕は足早にその音の方向へと足を運んだ。

そしてすぐにそれは見つかった。

滝というほどではないけど、岩壁から流れてくる水に、その下に池のように透き通る綺麗な水場が出来ていて、その周りを色鮮やかな果物がその実を実らせ、そしてその視界の真ん中には長い金髪が見えた。

きっと砂漠でオアシスを見つけた人は今の僕のような気持だろう。
うん。

.....ん？

金髪？

そう思って、足を動かしたら、

パキッ

小枝を踏んだ。

その音に反応したのか、長い金髪の持ち主が振り返る。

「.....」

目の前にいたのは、綺麗な女性だった。

外国の人なのだろう。青い海を思わせるような眼の色に、綺麗な混じりのない明るい金髪、少し赤みが見えるくらいに透き通った白い肌、顔は堀が深く、目鼻がハッキリとしていてモデル雑誌に出てくるようで、少し頬にそばかすが見えるのは、まだ幼さが残っているという感じだった。

彼女は僕と目が合うと、目を開いて驚いたようにこちらを見る。

僕は彼女の容姿に目を開く。一糸まとわぬ姿というものを初めて見たような気がした。

彼女の体は日本人ではあまり考えられないほどハッキリと凹凸があった。つまり出るところは出て、引っこむところは引っこんでいるということだ。

そして、この状況を段々理解してきて、彼女の表情が変わってきて、僕も僕できっと嫌な汗が出ていたのだと後になって思う。

僕は、誤解を生むまいように、できるだけ彼女の心証を良くしよう、思いついた言葉でこう言った。

「ハ、ハロー」

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアア！」

天と貫くような悲鳴と共に彼女が放つ握り拳が僕の顔面にクリーンヒットした。

外国人が日本人よりオープンな性格なんて誰が流したデマだろう。こんちくしょう。

そう思いながらすでに空腹と渴感が限界にまで来ていた僕は、彼女の止めの一撃で意識を手放した。

2日目(1)(後書き)

とりあえず、無人島ではなくなりました。

さて、彼女は正体は――

彼女に秘められた謎とは――

主人公と彼女の運命は――

つて別に次回予告風にしなくてもいいか。
とりあえずヒロイン？候補の登場ですね。

2日目(2)

「……HEY……HEY……」

耳元で誰かが呼んでいる。

ゆさゆさと僕の体が声の主によって揺らされる。

「HEY、HEY YOU!」

体を揺らす力が強くなった。

だけど僕の体は力が入らず、正直なところこのまま寝ていたい。

「まだ眠いんだ。もうちょっと寝かしてよ美晴^{みはれ}」

「?? What are you muttering?」

あれ?美晴ってこんな流暢な英語喋れたっけ? とうかなんか鼻のあたりがヒリヒリと痛いんだけど、なんでだ?

そうぼんやりと思い、目を徐々にかけていく。

「Are you OK?」

「……………グッナイ」

目の前には僕の顔を覗き込む金髪の女の人がいた。

ああ僕はまだ夢を見ているようだ。

「OH! Stay up! Don't sleep!」

そう言っ て僕の妄想が生み出したはずの美人の外国人さんが僕の体を激しくまた揺さぶる。

おかしいな。夢の住人のはずなのに、やけに感触が生々しい。というか暖かさも感じるし、いい匂いもする。

.....

(最近の夢は進んでるなあ) ↑意味不明

「HEY! Wake up!」

ビシッ! バシッ!

あれ? なんかこれ叩かれてない?

「HEY! HEY!」

ビシッ! バシッ!

滅茶苦茶痛いんですけど、あれこれもしかして夢じゃない? そう思うと、段々とさっき自分の身に起きたことを思い出し始めた。

(そうだ。腹減って喉が渴いて、水の音の方へ行ったら、この人がいたん..... / / /)

思い出すと同時に彼女の一系まとわぬ姿も一緒に思い出し、少し照れる。

「.....っ!っ!」

ビシッ！ バシッ！

って、ちょ！ さっきより力増してない！？ とうかなんかこの人無言で叩いてるよね今！

そして僕がいい加減再び目を開けると、そこには最後の一撃と言わんばかりの大振りに拳を握って構える彼女がいた。

「Y A A A A A A A A A ! !」

「——うわああああ」

彼女が拳を振りおろすと同時に、僕は体をねじって地面を転がるようにそれを避けた。

顔だけ動かして、自分の今いた場所を見ると、彼女の繰り出したパンチは地面にくぼみを作っていた。

なんてもんを人様にぶつけようしてるんだこの人は！？

もしあれを正直に受けていた時のことを想像すると軽く身震いする。

「O u c h.....」

彼女も加減をしなかったのか、自分の右手を胸のあたりで左手で包み、相当痛かったのだろう。プルプル震えている。

「D o n ' t a v o i d a s u d d e n.....」

彼女は涙目になりながらこちらを非難するような目で訴えてきた。
冗談じゃない。

「こっちは気絶させられるほどのパンチをもらったのに、さらにあ

キャンが「」できる」って意味で、イトウンは食べるの過去分詞かな？

どうも実際に英語を聞くのと、文字で見るとでは違うんだよね。合宿の時もかなり苦労したもんな。

「サ、サンキュー」

口ガチガチにしてそう答えた僕はその果物を受け取って齧りつく。味は完璧にりんごだった。見た目は普段見ているものよりずっと青っぽく、形も歪だったので見た目からはあまり想像できない味だった。

しかし考えるのはそこまでで、かなりの飢餓状態だった僕は、りんご（仮）の薄甘い果汁に喉を潤わされると、空腹も相まって夢中に貪り始めた。

ものの数秒と掛からずに食べ切った僕は、もう一個と思いきき彼女が採った木から2、3個採ろうと立ちあがった。冷静に考えれば南国の島国に林檎つてのも不思議だな。

「delicious?」

「ん？」

果物を採っていると彼女が後ろから話しかけてきた。

「あー。……I like this fruit」

「Oh, that's good」

どうやら結構な乱暴者かと思ったが、彼女はなかなか気さくな性格の人の様だ。

「えっと、My name is Rui Hoshino. N

ice to meet you”
“yha, I’m Loreena Simons. Nice
to meet you too”

なるほどロリーナ”シモンズさんね。うん、まあ挨拶は基本だよ
ね。

しかし、相手に僕が英語を話せると思わせるのはよろしくない。
だって今ので一杯いっぱいだし。

「その、I speak a little English」
「Oh……, It is a shame」

僕がはつきりそう言つと、ロリーナさんは明らかに残念そうな顔
をした。

「I finally found the man, at t
he very least” that” if」

今度はさすがに何を言っているのか分からないが、どうやら手
で小さな箱を作るようなジェスチャーをしているので、探したものか
何かだろうか？

しかし、残念なことに僕は首を傾げるしかできず、彼女もそれを
見てもう何も言わなくなつた。

取りあえずペットボトルに水を汲み、りんご（仮）を何個かビニ
ール袋に入れた僕は、一回荷物を取りに戻ろうと来た道をまた戻ろ
うとするとロリーナさんが声をかけてきた。

「Hey Rui. Where are you going?」

どこと言われても、荷物を取りに戻るって英語でどういうんだ？
えっと、マイバッグ、ゲット……通じないだろう。

まあニュアンスは違っけどこれなら言えるな。

「I go to this road. you do?」

多分だが、これなら意図は伝わったと思う。

「……………、OK. I will follow you」

ということで、ロリーナさんと一緒に荷物を取りに行くことにした。

道中何度か言葉を交わしたが、お互い半分くらいしか理解できていないのでたいして盛り上がりえず、ちよつと気まずい雰囲気のまま浜まで戻ってきた。

「Ooh! Unbelievable!」

「うわ！ な、なに？」

浜に置いておいた荷物を見て、急に彼女が大声を上げた。

そして足早にトランクケースの元まで行くと、慣れた手つきでそれを開けた。

（なるほど、彼女のトランクだったのか。……………それにしてもすごい偶然だな）

うれしそうにするロリーナさんの様子を傍目で見てみると、彼女は内側の小さいポケットから電子辞書のようなものを取り出した。どうやらアレが先ほど言っていたものらしい。

彼女はそれを開き何個かボタンを押した。そして、途中でこちらを向き「Are you from?」と聞いてきたので、「I'm from Japan」と教科書通りに答えるとまたボタンを押して、そして機械に喋りかけた。

そして、僕の方にその機械を向けて右端のボタンを押した。

『これ、ちょっと日本語になっちゃいますか?』

「……………」

なんだろう。この機械音らしくない生々しい音声と不思議なイントネーションは?

「?? mistake?」

僕がリアクションしないものだから彼女は間違えたのかと思っているらしい。

「えっと、合ってますよ」

取りあえず、意味は理解できるのでそう答えた。

すると、ロリーナさんは「Please again」と言っ
て、機械を僕の方に向ける。

その機械を両手に持って、ぐいっと突き出すようにしていると、女の子がバレンタインにチョコレートを好きな人にあげるシーン（漫画）っぽい。

「言葉合っています。理解できますよ」

僕がそう言い終わると、彼女は機会を自分の方に向けて左の方のボタンを押した。

「……………」

今度は英語が機械から聞こえた。どうやら翻訳機のようなのだ。

機械からの言葉を聞いたロリーナさんがうれしそう飛び上ったのを見る限りどうやら、あちらの翻訳はかなり正しいらしい。

すると彼女はその機械を使ってかなりしゃべり始めた。

『この島には、人がいないと思っちよったから、あなたに会えてうれしいそうです』

「……………僕も同じですよ」

『今の間は、なんでつすのよ』

「いえ、ちよつと文明の機器の限界について考えてしまつて」

『おかしいわね。あんたの言ってること意味分かんねえですぞ』

そりゃそうだ僕だつて意味分らないから、その機械が万能なのかそうじゃないのか。

『これから、どうすんだよ』

「……………そ、そうですね。僕はとりあえず、水と食べ物が入ったので、この島の周りを歩いてみようと思うんですが、ロリーナさんはどうしますか？」

『え！ そうなの！？ ……どうしましょうしょう』

「さっきの所もありますし、別に無理についてこなくても大丈夫ですよ」

『……………こんなところに女の子を一人にするきのねんこの鬼畜』

マン！』

今のは「ひどいわ」って訳せばいいんだよな。そうだよな。

「えっとすみません。そうですね。無神経でしたすみません」

『あ、えっと、そんなに畏まらないでくれよ。調子狂っちゃいますわ』

「ああ、ごめん」

『気にスンナよ』

なんか段々慣れてきたなこの機械の言葉にも

「えっと、まあ取りあえず、この島の広さだけでも知っておきたいんだけど、よかったら一緒にいて来てくれないかな？」

『いいわよ。どうせやることなんかねえんだからよ。』

「ありがとうロリーナさん」

『いえいえ、どういたまして。それとさん付は止めてくれ。気軽にロリーナと呼んで下せえ』

「うん。わかったよロリーナ。僕のことにも気軽にルーイって呼んでよ」

『ふふふ、よろしくねルーイ』

「あ、まともに喋った」

『???』

「いや、こつちの話」

可憐な外国人の女性をパーティに加えて、再び僕は、いや僕たちはこの島を回ることにした。

2日目(2)(後書き)

英文の文句はgoogle翻訳に言ってください。

はい、ということで、変な翻訳をする機械を巧み操る外人女性こと、ロリーナ〃シモンズさんが、主人公に加わりました。

最初もういつそ日本語話せる外人にしようかとか思ってたんですが、セミリアルを目指すと言ってしまったので、頑張って英文に挑戦してみました。

僕自身英語がすごく苦手なので、多分中学レベルの受け答えしか正しいのを使えていません。

まあでもわけわからねえことしゃべってるなあと思って読んでもらえたならそれが正解だと思います。

現在二作品同時に進めてますが、どっちも書いてみたかったものなので、これからも読んでいただければ幸いですw

2日目(3)

僕たちが島の外周に沿って歩きはじめて一時間弱、翻訳機を介しての会話にも（主に僕が）慣れ始めたところだ。

「そう言えば、その翻訳機って電池はどの位もつの？」

『こつああアタイの父ちゃんが作ったニュータイプなやつだから、毎日使っても半年は大丈夫なんよ』

「へえ、それはすごいなあ！」

『ちなみにエネルギー切れでも、これをご利用すれば』

そう言ってロリーナは僕が運んでいる自分のトランクケースから、握力を鍛える100均などでも買える例の器具のようなものを取り出した。

そして、それを翻訳機に取り付けて、にぎにぎし始めた。

『はははっ！ こいつを使えばどんなエキサイティングな状況でも素敵に無敵になれるのさ！』

つまり、それで充電するんだね分かりますよ。相変わらずその翻訳機が何言ってるのかは全然分かんないけどね！

僕は気を取り直して言葉を続ける。

「でもロリーナのお父さんはすごいんだね。そんな機械日本でも見たことないよ」

『そうだろうそうだろう。マイダディはすごいんだぜ！ でも確か日本のスタッフも協力してくれたとか言ってたでござる。だからあ

る意味で日本もやるじゃねえかってことよ」

「へえそうなんだ。もしかしてロリーナのお父さんってすごい会社の社長とか？」

「べ、別にそんなにすごくないわよ！ 子会社も含めて、た、たかが10万人の会社よ！」

「多ッ！ たかがとかじゃないって！ メチャクチャ大企業だよ！？」

「そうなのか？ アメリカンは3億人もいるのにそのうちのたった10万だぜい？」

どうやらこちらのお嬢様は、3千分の1という数字がどれだけ凄いかよくわかっていらっしやらないご様子だ。

「ともかくスゴイねロリーナのお父さんは」

「ありがとう。自分のことではないが、うれしいぞよ」

どうやら自分の父親のことを良く言ってもらったのが良かったようだ。

「そう言えば、ロリーナはどうして日本へ？」

「秋葉原よ！」

「……………」

『日本といえば電子機器！ 電子機器といえば電気街！ 電気街といえは秋葉原！』

あれ？ もしかしてスイッチ入りましたか？

「つ、つまり、日本には旅行で？」

『ノンノン、日本へは短期留学ぜよ』

「では何故秋葉原？」

『……………お主は妙なことを聞くのう？　東京に来たら秋葉原へ行くのは当たり前ではござらぬか』

なんか今のはちゃんと翻訳されている気がする。

「いや、でもデイズニーランドとか渋谷・原宿とかもあるよ？」

『デイズニーは別にメリケンにもあるでござる。渋谷原宿はニユーヨークやラスベガスよりもすごいところなのでござるか？』

「そ、それはどうだろう？」

『お主こそ、日本にいるのに秋葉原に行こうとは思わないのでござるか！？』

「い、いやあ、機械は苦手で」

自慢じゃないがマイパソコンなんて大学生だし、ましてやパソコンに触れるのなんて大学の課題をしたり、遊びに行く時の事前調査ぐらいだ。

『なんと勿体ない』

（珍しいなあ、外国の人が「勿体ない」なんて言うなんて……………あ、言ってるのは機械か）

そしてそのままガツクリとした感じで明らかに落ち込んでる様子のロリーナが言う。

『はああ、こんなことになる前に秋葉原に行ってみたかったでござるよ』

「はは、はは……………」

なるほど、父親が機械関係の仕事だから、そっち系の方なんだねロリーナは。……………てか翻訳が「ござる」で固定されているのは、こ

れ如何に……？

『そついうあんたこそ、どうしてアメリカへ来てたの？ 旅行？』

「あ、ああそれは」

そつ言つて僕の事情も説明した。

『そんながあるのだね』

「え、知らないの？」

『アメリカは広いから』

「なるほど……………」

それはそうだ。なんたつて日本の25倍の面積を持つてゐる国土だし、あつちにいた時に驚いたことの一つに、テレビのチャンネルの多さにも驚いた。全米で大ヒットぐらいしないと中々知る機会はないかもしれないな。

そつこつ言い合つて、お互いの情報交換（ごめんスリーサイズは聞けなかったよ）をした僕らは、夕日が沈み始めたのでキャンプをすることにした。

さて、ここで問題が発生だ。

その前にまずひとつ言つておきたい。

僕は別に餓えてはいない。もちろんさっきまでは色々あつて餓えてはいたが、今は大丈夫だ。

僕は自慢じゃないがそれほど性欲の強い方じゃない。

では、その問題とは。

（寝れません。寝ることができません）

目の前に見えるのは寝ているロリーナの顔。

月明かりだけだが、はつきり見える綺麗な金の髪を垂らし、無防備にはだけた服の隙間から見える白い肌。

ビックアメリカンなサイズの二つの果実が織りなす谷間。オアシス
ワンピースの裾から伸びる細いが肉付きの良い脚線美。

（そ、素数だ。素数を数えるんだ！）

「2、3、5、7、……………」

とても残念なことに、僕の残念な頭には素数なんてものはとっくの抹消されてしまったようだ。

目の前の無防備なロリーナ顔に釘付けにされてしまい、僕の思考もどこか彼方に行ってしまうそうだ。

この年になって恥ずかしいが経験のない僕にはとても辛い状況だ。もちろん彼女から距離をとって背を向けて寝ればいいだけの話なのだが、しかしそれこそまさに「勿体ない」というやつだろう。

（が、我慢だ我慢……………僕は僧、僧、僧、僧、肉欲獣じゃないよ、僧、僧、僧、僧）

ちなみ口ずさむ曲名は宇。田ヒ。ルの「ぼくは。ま」

そしてこの歌を30回くらい歌ったところで僕の意識も薄れていった。

2日目(3)(後書き)

更新遅くてすみません。

さて、ロリーナさんが機械オタクで、主人公が僧となりましたねw
一応タイトルがなぜ無尽島なのかってのはまだ秘密なんですけど、話はちよくちよく進めていこうと思っているので、暇な時にでも読んでいただけたらと思います。

ではw

3日目(1)

海の水が浜の砂をこする音。波の音。

早朝のおぼろげな日の光に照らされて、耳に入るf / α波を出す波の音で僕は目が覚めた。

やはり海岸近くは肌寒く、おそらく海の暑さというのは太陽光を砂がかき集めて起こるのだと僕は思う。

「ん〜、……今日中に島を一周できるといいなあ」

そう言って体を起こそうとするともにゆつと柔らかい感触がした。なんだろうと思って見てみると、

「A h a n……」

………オー、シット！　なんでロリーナが僕にくっついて寝てるんだ！

いや、問題はそこじゃねえ！

雀の鳴き声じゃないが、朝起きて朝日と鳥の鳴き声と隣に女の子。夢にまで見た「朝チユン」じゃないかああ！！

「……o h a n」

ぐっは！　何これ欧米の女の子ってなんでこんな色っぽいんだ！ただ寝ているだけなのに！

隣に眠る欧米美少女の思っても見ない柔らかい感触と色っぽさに、僕の心臓はバクバク鼓動していた。

そして魔が射す。

「……………す、少しくらいならばれないかな？」

いけないいけないと思いつつ、手が伸びる。

いや、いかんいかん。寝ている女の子に手を出すなんて紳士としていかん！

……………。

でも昨日の夜は1メートル以上空けて寝ていたはずなのに、くつついて寝てるってことはオツケーってことだよな。そうだよな！（↑違います）

そう思っ て僕は手を彼女の胸に――

「オブツハシヨウドクダー……………！！！！」

ピシッ（止まる時間）

ぶるぶる（震える手）

キョロキョロ（泳ぐ眼）

……………（冷静になるのに掛かった時間）

そして僕はそつと僕の服を掴む彼女の手を離し、ほんのちよつと距離を空けて彼女を起こした。

『どうしたんだよマイフレンド。朝からテンション低いでやんすよ』

「ううん。気にしないで、ただの自己嫌悪だから」

『なんだいそりゃ？ 自分のウ。コでも踏んだのかいファック？』

ちなみに翻訳機が言ってるのであってロリーナの言葉じゃないよ。多分「お腹でも痛いの？」って言ってるからね彼女は。多分。

「大丈夫。……うん。取りあえず今日こそ島を一周しよう」

『うんわかったあ　　ロリポン、ルイーのために超がんばるねえ』

「ロリポ……げふんげふん／＼　うん頑張ろう!!」

まったくこの翻訳機ときたらたまに意表を突いて変な言葉遣いするから困る。

ちよつと元気が出ちゃったじゃないか……

『どうしたんだ。顔がニヤケているでござんすよ』

「き、気のせい気のせい!!」

さて今日も頑張ろう。

今日もまたおいしい林檎（仮）を朝食に食べて海岸を歩く。
相変わらずロリーナと翻訳機の言語差というか表現力の違いに戸惑いつつもなんとか会話を楽しむ僕たち。

「そう言えばロリーナは短期留学って言ってたけど、日本語はどのくらい勉強したの？」

『……………』

「え？　なんで無言!？」

『コマカイコト、キニシテハ、イケマセーン』

「翻訳機が翻訳を怠ってる!？」

なんだこの胡散臭いアメリカ発音の日本語は。

「……というかもしかして勉強してない？」

「……………YES」

彼女は自分の声でそう言った。

なるほど、どうりで簡単そうな日本語の挨拶もできないわけだ。

『でも俺たちにはこのスーパーハイパーエクセレントダイナミック
ボルカニックエレクトロニックアルバトロス翻訳機があるから大丈
夫っす』

どう考えても駄目です。というか翻訳機でめえ絶対人工知能英語
でAIとか積んでるだろ？ 今自画自賛頑張ったろ？ ボルカニッ
クとアルバトロスは明らかにおかしいけどね！

「……やっぱりちゃんと自分の言葉で言えるようになった方がいい
と思うよ」

考えていることは口には出したいけど出せないの、取りあえ
ず助言だけしよう。

『そ、それはわかってるんや、せやかてそないなこと言っても、で
きんもんはできんよ。めっちゃムズイもん日本語』

「まあ確かに世界中でもかなり難しい言葉って言うけど……」

『そうじゃ！ なして日本人は色々一緒に使うばと、漢字だけでも
分らんちよに、ひらがなもカタカナも混ぜるんじゃ！ わけわか
らんよ』

「最もな話だね。……でもそれでも電気街で何か買いたいならせめ
て簡単な受け答えぐらいはできないとね」

第一その翻訳機じゃ相手によってはキレるかもしれないし。

『そぎゃんなこと言っても、勉強なんかしようと思っちえも出来ん
ばい』

「……僕でよければ教えるよ？」

『本当！？』

「うん。これもなんかの縁だしね。遠慮なく聞いてよ」

ドンと胸を叩いて僕は「任せとけ」と言った。
すると彼女はうるうると目を濡らした。

『ありがとー！ ルーイ！ 私うれしいヨー！ー！』

ロリーナはよほどうれしかったのか僕に抱きついてそう言った。
ちょ、ちょっ胸が！ 胸が！ でもやめないで！

『そうと決まったぎゃ、早速やるだぎゃ』

そう言ってロリーナは僕から離れ（あと30秒くらいあっても）、
早速やる気を出した。

「よし。島脱出とロリーナの日本語上達がんばろー！」

『うおおおおおおおおおおおおおー！』

こうして僕はロリーナに道中日本語を教えることとなった。

……………

にしても翻訳機のやつ方言オンリーだったけど、なんか普通に会
話してるみたいで良かったなあ

日がそろそろ真上に行こうかという時間。

道中簡単な日本語挨拶から教え教わりしていた僕たちは、ついに島を一周した。

浜に書いた大きな「SOS」の文字が下半分消えていたが、間違はなく僕の書いたものだった。

取りあえず島の大きさは大体歩いて一日と6時間くらいを時速3キロぐらいで歩いたと仮定すれば、島の外周は約90キロメートルで、円周は半径×半径×3.14（ゆとりじゃないんで）だから……、 $2 \times 3.14 \approx 90$ だから……、 $2 \times \approx 28$ ぐらいだから、直径約28キロメートルの島ってことか。

孤島と言うには大きいし、島と言うには小さいのがこの島かな。というかこのぐらいの大きさなら国が排他的経済水域狙いで取り合いすると思うんだけどなあ。

見たところ人工物もないし……

と僕がぶつぶつ考えている横で退屈そうにしていたロリーナが言った。

『ぶつちやけ、これからどうすんのよ』

「ごめん。ちょっと待って」

『うわあ、マジ使えねえこいつ』

直訳しちゃ絶対に駄目なんだけど、むかつくわあ

我慢だ我慢。頑張れ僕！

そして冷静に考えて僕は結論を出す。

「取りあえずもう食べるものもないし、ロリーナと出会ったところに戻る」

『わかった。おまえに従おう』

「よしそうと決まれば暗くなる前に行こう」

『サーイエッサー』

別に今は翻訳機使わなくてもよくないか？

こうして僕等は再び歩きだし、ロリーナ（裸）と出会った場所に戻ることにした。

ボカツ！

「あいたっ！？ ちょっとなんで殴るの？」

『神の啓示がありましたので』

3日目(1)(後書き)

二か月ぶりの投稿です。

ちようスローペースで申し訳ないです。

さて、次回からいよいよ無尽島の片鱗が見え始めます。

島の謎とは――

ルイーたちを待つ試練とは――

そして、

翻訳機は口調パターンはネタ切れないのか

乞うご期待です。

誤字脱字が多くてすみません。気づいて親切な方がいらっしやいましたらご一報ください。一応にやにやしなから自分の書いたやつ読み直したりするんですけどね……。

ではw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6836/>

無尽島

2010年11月11日13時40分発行